環境研究の連携と進化をめざして

独立行政法人 農業環境技術研究所 理事長
陽 捷行

環境研究に携わる国立および独立行政法人の研究機関が情報を相互に交換し、環境研究の連携を緊密にするため、環境研究機関連絡会が平成１３年１０月に設置されました。この連絡会の目的は、１）環境研究の推進状況の紹介と相互理解、２）環境研究の主要成果の紹介、および３）環境研究およびこれに関連する事項の協力・連携・連絡、にあります。この目的に基づいて、ここに「環境研究機関連絡会成果発表会ー環境研究の連携をめざしてー」を開催する運びになりました。

環境研究を進めるにあたって、われわれはどのように考えていけばいいのでしょうか。私は、ここで次の四点を強調します。それは、「分離の病」を克服し、「国際・学際・地際」を推進し、「俯瞰的視点」を維持し続け、「自他の共生」を図ることです。

「分離の病」は三つあります。専門主義への没頭や専門用語の迷宮など生きていない言葉を使う「知と知の分離」、理論を構築する人と実践を担う人との分離やバーチャルと現実の分離に見られる「知と行の分離」、客観主義への埋没、知と現実との極端な乖離（かいり）に見られる「知と情の分離」がそうです。時間と空間を越えて「環境を守る」ためには、これらの分離を可能な限り融合することが必要なのです。

国籍、人種、宗教、政治、経済体制、貧富、性別などを差別せず、お互いが相手の立場で思考し、意見の対立が感情の対立にならない交流こそが、「国際」化と考えます。空間を超えて生じている環境問題を解決するためには、この国際化を無視することができません。広く分野や所属をこえて研究を共にする「学際」は、説明の必要がありません。現場のない環境研究はありえません。これが、「地際」の重要な点です。「知と行の分離」にもつながるところがあります。「地際・学際・国際」の融合こそが環境研究の決め手になるでしょう。

「俯瞰的視点」とは、人類が２０世紀に獲得した最大の成果です。文明史上、人類が最高の高度から地球を眺め、人類と地球の来し方行く末を認識する視点です。２０世紀の人類は月にその足跡をしるし、火星に生き物が生息しないことを確認し、人類のあり方を考える俯瞰的視点をえたのです。

環境研究を一層進化させるために、さらに「自他の共生」が必要です。人類は自分たちの利益を増すことに努力し、今日の繁栄を手に入れました。これは、すなわち「自」の歴史でした。その結果、環境問題が起こり、「自」を主体におけば行き詰まりが見えることを理解しました。歴史は、「自から他へ」に視線を向けなければならないことを教えてくれたのです。われわれは、遅まきながら環境を視野に入れた科学が必要であることに気づきました。「自他の共生」を図らなければ、地球の、ひいては人類の将来がないことを学びました。この原理は、環境問題を研究しているわれわれの組織においてもしかりでしょう。

自然界では「自」と「他」が併存し、両者の共存で全体が成り立っています。併存する「自・他」を含む全体が機能することは「自他の共生」といえます。これによって自然界はうまく運行しています。この自然界の「自他の共生」を、環境を研究している我々の個々の組織にもうまく適用させることが肝要と考えます。

組織と組織の社会ですから、自他の均衡は難しく、そこには「自他の衝突」が待ちかまえています。しかし我々は、知恵と協力と活力を背景に、「自他の共生」のシステムを構築しなければなりません。それぞれの研究所が、単に組織だけを守る共同体ではなく、広く環境を保全できる機能体として働く場をつくる必要があるのです。

このように、「分離の病」を克服し、「国際・学際・地際」を推進し、「俯瞰的視点」を維持し、「自他の共生」を図ろうとする意志の一つが、この環境研究機関連絡会成果発表会だと考えます。この発表会を機に、僅かでも環境研究の進展が期待できれば、大きな喜びとなります。

発表課題は、各研究所のオピニオン・リーダーによる最も今日的なテーマに彩られています。課題のキーワードは、大気（気象、物質、海）、物質（動態、農地、生物、都市、海）および生物（海、河川）に大きく分類できます。各研究所の研究を推進していく過程で、これらの成果発表が参考になることを期待して開会の挨拶とします。